

【基調講演】

Le français langue seconde au cœur des cultures : Tour d’horizon de pratiques d’enseignement inclusives au Québec

Françoise ARMAND

多文化の中心にある第二言語としてのフランス語 —ケベック州でのインクルーシブ教育の実践—

フランソワーズ・アルマン
報告：小松 祐子

ケベック州の社会文化的なコンテクストのなかでフランス語教育について考えることをテーマに掲げた日本ケベック学会 2022 年度大会では、モンレアル大学教育学部のフランソワーズ・アルマン（Françoise Armand）教授に基調講演をいただいた。パンデミックの影響により事前に収録された動画による講演となったが、インクルーシブなフランス語教育プロジェクトの興味深い実践例を、豊富なスライド資料や教室活動の動画を用いて、明快な口調で次々と手際よく紹介くださり、言語文化的多様性が増すケベック州において複言語・複文化アプローチによるフランス語教育を行う重要性とその有効性について、短時間でしっかりと理解することができた。動画に登場するアロフンの子どもたちが生き生きとした表情で教室活動に参加する姿が印象深く、学習者のアイデンティティを肯定する教育の価値を認識させられた。フランス語での講演内容を以下に日本語で要約する。

1. ケベック州の社会言語的コンテクスト

ケベック州ではフランス語憲章（101 号法、1977 年制定）の規定により、新規移民の子どもたちが初中等教育をフランス語で受けることが義務付けられている。フランス語学校ではさまざまな地域の出身で異なる言語をもつ生徒を多数受け入れており、2019-2020 年には、ケベック州で就学前・初等・

中等教育を受ける生徒の31.2%が移民家庭の子どもであった。とりわけモンレアル地域の学校では移民の生徒が67.3%を占め、母語がフランス語でも英語でもないアロフォンの生徒の割合は43.1%であり、フランス語を母語とする生徒の割合(37.6%)を上回っている。これらの学校では180種類もの言語が話されている。

ケベック州におけるフランス語は「脆弱な多数派」言語(Mc Andrew, 2010)であり、公的生活での共通語であり文化を伝える言語としてのフランス語の役割は、とくに英語との競合により危機的状況に置かれている。このような状況のなかで、移民の生徒たちの出自の言語は、フランス的事実の肯定を妨げるものとみなされる恐れがある。アロフォンの生徒たちの母語や文化的背景をいかに考慮に入れるかが課題となる教育現場においては、そのための準備がほとんどなく、教師らは矛盾した言説によって引き裂かれていると感じている(Armand, 2021 ; Thamin *et al.*, 2013)。

2. 理論的基盤

複言語アプローチの基盤となるのは、Cumminsの共有基底言語能力モデルにもとづき、能力とスキルの転移によって学習を促進する考え方である。また、Cumminsの二重梯子のイメージで知られるように、生徒が第二言語で到達できる可能性のあるレベルは、母語で到達済みのレベルに依存すると考えられ、移民の子どもたちの母語を考慮することの重要性が確認される。複言語アプローチでは、さらに、Lambertの加算的バイリンガリズムの理論も参照される。他言語を競合により排除するのではなく、認知言語的能力の向上に複合的に寄与する要素としてとらえ、これを肯定する。

複言語アプローチによって、アロフォンの生徒たちは、さまざまな言語で自分の知識とスキルを結集・強化し、フランス語の学習とフランス語を使った新しい知識の習得に前向きに取り組むことができる。生徒の母語を考慮に入れることは、言語の相互依存と転移によりフランス語の習得を促進するだけでなく、彼らの言語文化的背景を承認し尊重することとなり、多様性にかかれた前向きな雰囲気クラス内に作り出すことができる。

3. ケベック州におけるインクルーシブな教育実践(複言語アプローチ)

ケベック州でのインクルーシブな教育実践(複言語アプローチ)において、教師たちに求められるのは、子どもたちや彼らの家族の経験と知識を、障害

ではなく資産と見なし、二言語または複言語話者となりつつあるアロフンの子どもたちの母語を承認することである。また、学習者が異なる言語のあいだを行き来することを正当なことと考え、その価値を認めることが重要である。

ÉLODiL（「言語への目覚め、言語多様性への開かれた態度」研究プロジェクト）の公式サイト上には、このような複言語アプローチにもとづくインクルーシブ教育実践に関する多くのリソースが公開されている²。代表的な実践例として、1) 言語への目覚め活動、2) 複言語アイデンティティ・テキスト、3) 複言語アイデンティティ・テキストと演劇、という3種類の活動が挙げられる。

「言語への目覚め活動 (Language Awareness / Éveil aux langues)」は、1980年代初頭に英国で登場し、Eric Hawkins と James Garrett が創始者とされている。欧州では Eulang（フランス）、EOLE（スイス）などのプロジェクトが展開されている。さまざまな言語コーパスとの接触により学習者に言語の多様性を認識させ、言語の機能について内省的に観察するメタ言語スキルの開発を目指すのが「言語への目覚め活動」である (Armand et Maraillet, 2013)。子どもたちは「言語の花」活動 (図1) により複数の言語を学び合い、月を表す単語や数の表現、否定の表現などを比較することにより、言語による単語や文の構成の違いを認識し、メタ言語能力を発達させる。また、これらの活動を通じて、自己の言語を相対化し、互いの言語文化への理解を深め、尊重しあう姿勢を身につけることが可能となる。



図1 ÉLODiL 言語の花 (あいさつ)

「複言語アイデンティティ・テキスト」では、生徒たちが自分の家族について母語とフランス語とで作文し、家族が集う発表会の場で読み上げる。母語を大切にしながらフランス語習得を進めることによって子どもたちは自信を深め、見守る家族らも成果を実感する（講演会では作文発表会の様子が動画で紹介された）。

アルマン教授のプロジェクト（Recherche FQRSC, Armand *et al.*, 2015）では、複言語アイデンティティ・テキストを実践したグループ、およびテキスト作文に加えて演劇活動を行ったグループを統制群と比べる実証研究を行っており、実験群の生徒たちは、統制群に比べて、フランス語で書くことに対する意欲、自己肯定感、有能感を持つようになったことが確認されている。またアイデンティティ・テキストの作文だけでも単語数、思考力、語彙力が向上したが、作文に演劇活動を加えることにより、フランス語で書くことにさらに積極的な取組みが見られ、より長い文章、より発展した考え、より多くの語彙知識が得られたことが示されている。

4. 「ÉLODIL 複言語アルバム：オーラルと筆記言語の能力開発」プロジェクト

「ÉLODIL 複言語アルバム³」（図2）のプロジェクトでは、複言語アプローチにもとづく就学前教育の教材として11の絵本作品を収めるデジタルアルバムが開発されている。アルバムは、ケベック州の学校で最も話されている言語（アラビア語、中国語、クレオール語、スペイン語など）、モンレアルの実験対象地区で最も話されている言語（ベンガル語、タミル語、パンジャブ語など）、さらに先住民の言語（アティカメク語、イヌー＝アイムン語）の計22言語に翻訳され、全作品にフランス語音声、7作品には他の言語の音声も収録されている。これらのアルバムと教材シートは、2021年9月から、ケベック州のすべての学校図書館でデジタル・プラットフォーム上での無料閲覧が可能となっている。

プロジェクトでは、11作品中7作品について、教育活動の設計と実験が行われた（Armand *et al.*, 2021）。ケベック州就学前教育課程カリキュラム（2021年）にもとづき、「読書の準備」、「語彙の活動」、「物語のオーラル理解（インデックス・リーディング）」、「言語多様性への開かれた態度」、「筆記の概念」、「語りの創作」などの教材シートが作成され、教育活動の設計が行われた。実験では、実験群10クラスと統制群6クラスの比較が行われ、開発教材による指導を受けた実験群の子どもたちは、統制群の子どもたちよりも、

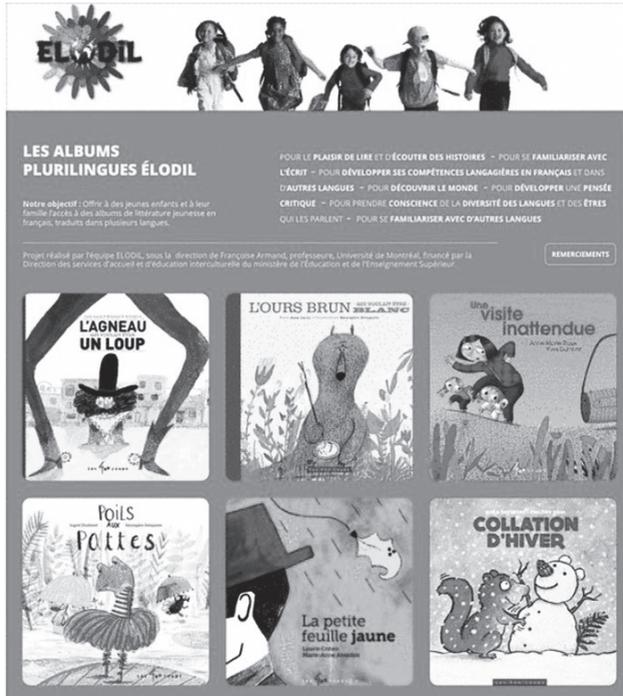


図2 ÉLODIL 複言語アルバム

フランス語学習に自信をもち、フランス語を聞き話すことを好むとともに、自分の母語に誇りを持つことが明らかになった。多くの教師が、生徒たちのオーラル理解能力、物語のテーマについて考察し議論する能力、新しい語彙の獲得に発達が見られ、学習意欲と満足が増していると答えている。他の言語での「回り道」が、子どもたちのフランス語学習への取組みを強化することが明らかになった。

5. まとめとして

これらの実践例からわかるように、二言語 / 複言語話者への途上にある幼いアロフンの子どもたちを支援するには、「彼らの言語的背景を受け入れ尊重することが、指導言語を学習する上での障害ではなく、資産である」ことを強調することが重要であり、ケベック州就学前教育課程カリキュラムでもそのように推奨されている。

多言語多民族の環境で、学習のための肥沃な土壌を作るには、生徒たちのフランス語学習をサポートしながら、自分自身を母語で表現する可能性を認める必要がある。彼らがコミュニケーションの必要性のために自発的に自分自身を表現するときに、彼らを検閲したり罰したりすることは、明らかに同化主義の考え方に属するものであり、学校からは禁止されるべきである (Armand, 2021; Armand *et al.*, 2021)。複言語・複文化アプローチにもとづき、アロフォン生徒たちの母語と文化的アイデンティティを尊重しながらフランス語習得を目指すインクルーシブな教育が重要である。

注

- 1 Comité de gestion de la taxe scolaire de l'île de Montréal (2020). *Portrait socioculturel des élèves inscrits dans les écoles publiques de l'île de Montréal* (Inscription au 8 novembre 2019).
- 2 ÉLODiL www.elodil.umontreal.ca (2023年6月1日最終確認)
- 3 « Les albums plurilingues d'ÉLODIL » (2019). アプリケーション開発 : Armand, Gosselin-Lavoie et Maynar, 技術開発 : Toumoro. 資料 : <https://www.elodil.umontreal.ca/albums-plurilingueselodil/documentation> (2023年5月28日最終確認)

参考文献

- ARMAND, Françoise (2021) « L'enseignement du français en contexte de diversité linguistique au Québec : idéologies linguistiques et exemples de pratiques de classe », dans Maryse POTVIN, Marie-Odile MAGNAN, Julie LAROCHELLE-AUDET et Jean-Luc RATEL (dir.) *La diversité ethnoculturelle, religieuse et linguistique en éducation*, 2^e édition, Fides éducation, pp. 220-233.
- ARMAND, Françoise et Érica MARAILLET (2013) *Éducation interculturelle et diversité linguistique*, publication en ligne sur le site ÉLODiL. <https://www.elodil.umontreal.ca/guides/education-interculturelle-et-diversite-linguistique/> (2023年5月28日最終確認)
- ARMAND, Françoise, Geneviève AUDET et Catherine GOSSELIN-LAVOIE (2021) « Le soutien à l'intégration et à la réussite éducative des enfants allophones à l'éducation préscolaire », dans Annie CHARRON., Joanne LEHRER, Monica BOUDREAU et Elisabeth JACOB (dir.), *L'éducation préscolaire au Québec*, Les Presses de l'Université du Québec, pp. 144-161.

- ARMAND, Françoise, Marie-Odile MAGNAN, Garine PAPAIZIAN, Lilyane RACHÉDI, Cécile ROUSSEAU, Michèle VATZ-LAAROUSSI et Catherine MAYNARD (2015) *Développer les compétences à écrire d'élèves allophones immigrants en situation de grand retard scolaire au secondaire au moyen d'ateliers d'expression créatrice théâtrale, d'approches plurilingues de l'écriture et de rétroactions correctives* (2013-ER-165406). Programme de recherche sur l'écriture - action concertée. Rapport déposé au ministère de l'Éducation, de l'Enseignement supérieur et de la Recherche (MEESR) et le Fonds de recherche du Québec – Société et culture (FRQSC). https://frq.gouv.qc.ca/app/uploads/2021/06/pt_armandf_resume_allophones-immigrants.pdf (2023 年 6 月 3 日最終確認)
- Mc ANDREW, Marie (2010). *Les majorités fragiles et l'éducation : Belgique, Catalogne, Irlande du Nord, Québec*. Les Presses de l'Université de Montréal.
- THAMIN, Nathalie., Élodie COMBES, et Françoise ARMAND (2013) « Tensions discursives autour de la prise en compte de la diversité linguistique dans les écoles montréalaises », dans Stéphanie GALLIGANI, Sandrine WACHS, et Corinne WEBER (dir.). *École et langues : difficultés en contextes*, Riveneuve Éditions, pp.17-40.